

原典で読む 外国人が見た日本



高橋知明

(瀬田玉川神社禰宜・公益財団法人鎮守の森のプロジェクト事務局次長)

第一回 ローレンス・オリファント『エルギン卿遣日使節録』

普段当たり前と思っていることでも、外国人からの指摘で初めて気付くことがしばしばあります。

この連載では、主に幕末以降日本に来た外国人たちが、当時のこの国をどう見たかといういくつかの記録を紐解きながら、私たちが大切にしたいこの国の心や価値観について紹介したいと思います。

初回は、ローレンス・オリファント(一八二九—一八八八)の『エルギン卿遣日使節録』(雄松堂書店、一九六八年初版)より紹介します。

幕末外交史に関心が深い方ならば、安

では、オリファントは当時の日本を或いは日本人をどう見たのか、もう少し詳しく見てみましょう。

先ず日本のお店や家の佇まいなど日常のごくありふれた光景について、「入念に磨きあげられた階段を登ると、最上段に日本のスリッパが並んでいる」「足もとに敷きつめた畳の異常な清浄さ」と記録するなど、清潔を好み、物を大切に、質素の中にも贅沢を伺わせる生活の中の美を見出しています。

また、江戸の街を歩いている時、彼は「日本人はすべて小さな携帯用のインクスタンドをひもで胸に下げている。……懐にはたくさん紙がある」という光景を目にし、多くの国民が読み書きができて、常に何かを記録に留める習慣があるという教養の高さに目を見張っています。

他にはこんなことも。「われわれの部屋には錠も鍵もなく、開放されていて、宿所の近辺に群がっている付添いの人たちが誰でも侵入できる。……誰でもほしくなるようなイギリスの珍奇な品々をいつも並べて置く。それでもいまだかつて……何かがなくなったりとこぼしたためしがない」と、治安の高さに驚くと同時に、日本人が誇りをもった国民として詐欺や窃盗、盗賊、強盗などを蔑視し嫌悪して

政五年(一八五八)に来日したイギリスの使節エルギン卿ジェームス・ブルースの名前は知っているとありますが、そのエルギン卿の秘書として随行し、清国との天津条約や日英修好通商条約の締結の使命を達成することに貢献し、さらにその詳細な東洋紀行をまとめ、その経緯を広く世に紹介したオリファントの事蹟は、あまり知られていません。

オリファントは、日英修好通商条約の締結のためエルギン卿に随行して来日したわずか二週間に、日本の風光の美しさや都市の繁栄はもろろん、比較的身近な日常生活にうかがえる日本人の特色、また日本の家族的な社会の特色や天皇を戴



ローレンス・オリファント

いることなど、日常の文化水準の高さに感嘆しています。

さらに、日本社会の特色も記しています。例えば、日本には神道という国民的宗教があり、その中心的存在(現世的頭首)はミカド(天皇)であるとして、「崇拜の主要な対象である神格は、女神天照大神、すなわち日本の守護神である。……このミカドは、日本の精神上的の皇帝であるうえに、この世にある彼の臣下と来世の諸霊及び聖徒との間をとりなす仲介者の一種である」と、日本の国柄について、とても的確な捉え方をしています。江戸時代の日本といえば、徳川將軍家が国の支配者で天皇は忘れ去られていたと言われることが多いのですが、彼の見方はそうした通念とは違っていたようです。あるいは女性の地位について彼はこう述べています。「おそらく東洋で女性にこ

く日本の国柄など、こと細かにこの国の特徴を書き残しています。

私が特に驚いたのは、彼が日本人の弱点をしっかりと指摘していたことです。彼はそれを「彼らの善良な性格が多くの弱点によって曇らされていることは否定できない。その弱点がなければ彼らは人間以上のものになってしまいうだろう。彼らが執念深く、迷信的で、傲慢で、極端に名誉を固執し、またしばしば名誉を守るために、あるいはその復讐のために残酷峻厳な手段に訴えることはよく知られている」と書いています。武家社会の時代のことですが、現代の日本人にも当てはまる要素があるようにも思えます。同時に「弱点がなければ彼らは人間以上のものになってしまいう」という言葉からは、日本人の素晴らしさは自分たちの弱点を克服する努力によって成し得ている、と捉えていることがうかがえます。

さすがは外交官秘書、というより「スパイ!?!」と思えるほどの観察力と洞察力ですが、オリファントの日本に対する全体的な印象は「この愉快きわまる国の思ひ出を曇らせるいやな連想はまったくない。来る日来る日が、われわれがその中にいた国民の、友好的で、寛容な性格の鮮やかな証拠を与えてくれた」という言葉に象徴されるように、きめて高い評価ばかりです。

れほど多くの自由と大きな社会的享樂が与えられている国はないだろう。……この国では『家族』がきわめて重んぜられているので、国の法に適ったすべての権利は彼女たちに属している……女性は隔離されることなく、劇場にも、食事にも、遊山にも、また草花の展示会にさえも出かけ、思うままに振舞うのである」と。封建的な身分社会といったイメージとは裏腹に、女性を大切に温かな家族社会であったことがわかります。

こうした背景を見ると、後に迎える明治維新を皮切りに日本は欧米列強に肩を並べる発展を急激に遂げますが、それは単なる偶然ではなく、元々素地があったから成し得た結果であると考えられることもできるでしょう。

オリファントは日本でのひと時を終えて、上海からロンドンにいる母親に宛てた手紙にこう綴りました。

「日本人は私がこれまで会った中で、もっとも好感のもてる国民で、日本は、貧しさや物乞いのまったくない唯一の国です。私はどんな地位であろうともシナへ行くのはごめんですが、日本なら喜んで出かけます」と。

外交官秘書として海外の様々な地を訪問してきた彼が、この国に魅了され、親愛と理解に富んだ態度で率直に紹介したことがわかりますね。